

フィンランド・ラーティ大学女性協会からのお客様

Arja Pelliniemi さんという方から阪田敦子会員のパソコンに「visit from Lahti」という題で次のようなメールが届いたのは6月16日の夜遅くだった。——「私はラーティ大学女性協会の会員です。あなたのイーメール・アドレスは、私の長年の友人イーヴァ・ホンカサロさんから聞きました。私は、夫、息子夫婦とその1歳半になる息子と、6月20日から25日まで京都モントレイホテルに滞在し、それから箱根に発ちます。私は大学女性協会の熱心な会員ではありませんが、外国人女性にフィンランド語を教える会の活動には参加しています。私は英語とスウェーデン語の講師、夫は医者、息子は弁護士、彼の妻は法律を勉強中です。ラーティと京都との関係はつい最近知ったので、こんなに遅くなりましたが、メールをお送りしています。」



阪田会員は、とりあえず支部長、副支部長、書記、国際委員にメールを転送して、どうしたものかと皆の意見を聞いた。久保支部長を始め大方の意見は、25日(土)に行われる支部例会「留学生を招いてのシンポジウム」に彼女を招待して、私たちの活動の一端を見てもらい、そのあと彼女に挨拶をお願いして、少しの間でも出席会員との交流が持てれば、それが一番いいのではないかと、というものだったが、とりあえず彼女の京都での予定が分からないので、メールを送って聞いたらどうかということになった。それでメールを送ったが、なしのつぶて(後で聞けば、出発したあとだった)。阪田会員は、1994年にご夫妻でフィンランドを旅行なさった時、ラーティにも立ち寄り、会長ホンカサロさん、京都とラーティとのペアリングの提案者である日本美術の専門家ソニア・セルヴォマさんなど、3~4人の会員とお会いになっている。1995年に横浜で国際大学女性連盟(IFUW)の国際会議が開催された時、ホンカサロさんは会長としてそれに参加し、会議後の旅行で京都を訪れ、阪田会員の家にホームステイをなさった。それ以来彼女と交流のある阪田ご夫妻は、メールを送ってきたホンカサロさんの友人アルジャ・ペリニエミさんにご挨拶のために到着日20日の夕方ホテルにいらっしゃるといっているので、その時に彼女の京都での予定を聞いてもらうことにした。

その結果、25日には京都を出発するので、都合が良いのは23日ということが分かった。急きょ会員の都合を聞き、高橋副支部長、廣田会員、国際委員の阪田と中川、計4名が参加し、中村会員は昼食後少しの間加わるということになった。

【京都支部とラーティとのつながり】

ご夫妻には京都平安ホテルの和食どころ「帆船」でお昼をご馳走することになり、阪田会員にホテルまで迎えに行ってもらった。手籠弁当が美しく並べられたテーブルに全員が座り、高橋副支部長がまず歓迎の挨拶を申しあげた。——「ペリニエミさんの京都訪問を歓迎し、ご一緒にお食事したり、京都をご案内できる機会を得たことをうれしく思っています。これもこれまで双方の先輩会員の方々が、京都とラーティ大学女性協会との関係を大切に繋いでくださったお蔭だと思います。JAUW ならではのこの機会を大切に、お互いの情報を交換しながら、心温まる時間を共有したいものと考えます。十分なおもてなしは出来ませんが、これからの半日ごゆっくりお過ごしくさせていただきますよう。」

そのあとペリニエミさんがお礼の挨拶をなされた。——「私はアルジャ・ペリニエミと申します。今日は京都支部の皆さんがこのように私たち夫婦をお招き下さってありがとうございます。私は職業学校で英語とスウェーデン語の講師をしていました。言語学の修士号をもっています。私が70歳になったので、息子がその記念にこの旅行をプレゼントしてくれました。もともと費用は全部私が出しましたが。それで私たち夫婦と息子の家族3人の5人で旅行しています。京都では伏見稲荷、二条城、金閣寺、京都御所などに行きました。私は仕事をもっていたので、ラーティ大学女性協会ではあまり熱心な会員ではありませんでしたが、私の長年の友人のホンカサロさんからラーティと京都とのペアリングの関係をごく最近聞き、メールをお送りしたところ、このような会合にお招きいただき、とても感謝しています。出発前に京都からの毎年の支部活動報告を興味深く読みました。」

【ラーティの冬の寒さ 何と今年は -32°】

梅酒で乾杯をして食事を始めた。お2人とも少し太っていらっしゃり、北欧の方らしく穏やかな印象だった。ご主人がアイパッドをご持参で、ご家族、子供さん、お孫さんの写真などをたくさん見せてくれたので、ラーティでの彼らの生活の具体的なイメージを持つことができた。興味深かったのは、-32°Cを指す寒暖計とご自宅の家の前の1.5メートルの高さの雪のスロープの写真だった。冬のラーティの寒さは平均 -4°~-10°C だそうだから、今年の-32°Cは50年来

の異常な寒さだったということが分かるが、雪のスロープを乗り越えて家の玄関から出入りするのだが、まず外には出られない寒さだったとのことである。また、別荘の庭にあるサウナ小屋のそばに小さな池があり、その水面にぷくぷく泡が出ている写真があった。泡を出す機器を入れて、絶えず泡を出すことで池の水面の氷結を防いでいるのだそうである。そうまでしてサウナに入り、そのあと池に飛び込みたい北欧の人の気持がもうひとつ理解できないというのが正直な感想ではあるが。

その他色々な話題に興じながら、お食事をいただいた。てんぷらはまだ食べたことがないとのことだったが、ナスの話になり、フィンランドのナスは日本



のそのの3倍も大きいというので驚いた。北欧の夏は白夜で太陽がいつまでも照っているので、それを吸収して大きくなるとのこと。また、それをジャムにするというのでさらに驚いた。ナス紺の皮と白い中身のコントラストが美しい日本ナスの浅漬けの漬物を思い浮かべた。

【フィンランドの教育・フィンランド語・IFUW】

彼女は言語学の修士で、職業学校で英語とスウェーデン語の講師だったということで、フィンランドの教育制度やフィンランド語のことが話題になった。フィンランドの公用語はフィンランド語とスウェーデン語だが、英語は必修言語で、小中高以外の全ての学校でも英語を教えることが義務付けられているということだった。また、フィンランド語が、ヨーロッパの大部分の言語と大きく異なっているということは私たちもぼんやりとは知っていたが、ウラル語群に属し、北欧の言語や、英語・ドイツ語などのインド・ヨーロッパ語群とは文法も語彙も異なること、しかし孤立した言語ではなく、東ヨーロッパ、例えばハンガリー語と同じグループであること、一番近い言語はエストニア語であること、また、ほぼすべての綴りを発音すること（例えば、彼女の名前は *Arja Pelliniemi* で、アルジャ・ペリニエミと発音する。（市の名前 *Lahti* は正しくはラハティなのだが、われわれはずっとラーティと呼んできたので、そのままに

しておく))、いつも第1音節にアクセントを置くこと、などなど興味深いことを色々話してくれた。聞いていると、日本語に似ている点もあり、日本人には学習しやすい言語かもしれないと思った。

また、なぜ6月に日本にいらっしやったのか、6月は日本では梅雨で雨が多く、観光にはあまり適してはいないが、と言うと、日本ではいつが観光シーズンなのかと聞くので、空気がさわやかで、紅葉も美しくなる11月が良いと言うと、フィンランドでは11月はジャムや保存食を作るのに忙しく、出かけられる月ではないとの返事だった。冬の寒さに備えて、色々な果物のジャムやマーマレード、キュウリのピクルスなどの保存食を作って地下室に備蓄しておくのは、今でも北欧の冬の伝統行事なのだとわかった。きっとナスのジャムも作っていることだろう。

食事が終わり、コーヒーは中庭でいただいた。そこに中村会員が、1989年にヘルシンキで開催されたIFUW（現在はGWI）の国際会議に彼女が参加した時の写真持参で加わった。廣田会員、阪田会員もその会議に参加していたので、話は大いに盛り上がった。ペリニエミさんは、職業をもち、子育てがあり、親の介護もあったので、IFUWの国際会議には参加したことはないとのことだった。

【平安神宮の散策】

午後は平安神宮にお連れすることになり、高橋、廣田、阪田、中川がお供した。あいにく花菖蒲は終わった直後だったが、アジサイが美しく、萩は咲き始めたところで、手入れの行き届いた回遊式の庭園は充分美しかった。ご主人がお話し好きで、アイパッドから色々な写真を私たちに見せながら、ゆったりと池のほとりを散策した。

ご主人はラーティのコーラスグループのメンバーで、月に2度は舞台に立つとのこと。ラーティ・オーケストラの前で歌うタキシード姿のご主人の写真があった。歩きながらフィンランドの歌を素晴らしいバリトンで披露して下さった。また、彫刻コンテストがあり、それにも参加なさったとのこと。それは、直径1メートルぐらいの大木を、1.5メートルぐらいの長さに切ったものを渡されて、マキを割る時に使う斧を使って、そこから熊を彫りあげるという競技である。1度でも変なところに斧を入れると、やり直しのきかない難しい作業だが、何度か参加することでうまくなり、去年は5名の優秀賞受賞者のなかに入ったということで、屈強な男性5名がそれぞれ自分の彫った熊の作品を前

に並んでいる写真を見せてくれた。フィランドは「森と湖の国」として有名だが、ラーティも森が多く、嵐で多くの大木が倒れるので、その活用法の1つなのだそう。その作品は玄関の傍に置いてあるが、そこが適当な場所かどうかはまだ分からない、と奥様は微妙な言い方をなさった。

ご主人は庭園にある大木を見ては、これぐらいなら熊が彫れる、と言っていた。彼は特に松に関心を示し、ヨーロッパの松はまっすぐ上に伸びて、幹に枝は無く、先に葉が付いているだけだが、日本の松は下から枝が伸びていて、幹はまっすぐなもの、斜めにゆがんだものなど、あらゆる形態があり、とても面白いとの感想だった。日本人は特に松が好きで、その自然な形を大切にしながら、美しく見えるように毎年庭師が剪定しているというに驚いていた。

【フィンランドのエネルギー政策・難民問題・女性の国会議員数】

池にかかった橋の途中にある休憩所で、少しのあいだ腰を下ろし、池の鯉に餌をやりながらもおしゃべりは続いた。他にも興味深い問題が話題にのぼり、原発の話も出た。フィンランドがエネルギーを得る方法の1つとして原発を維持する決定をして、そこから出る核廃棄物の貯蔵庫を、地下100メートル以上（ご主人の思い違いで、深さ500メートル以上）の深さのところにある岩盤層まで掘り下げて作っていて、そこで放射能が出なくなるまで140年間以上貯蔵するというのは、いかにも地震の経験のないフィンランド人の発想だと興味深かった。反対はなかったのか、と聞いたのに対して、どんな問題にも反対はあるものだ、とのお返事だった。日本もエネルギーを原発に依存する決定をしているが、地震大国の日本では、フィンランドのように地中に貯蔵庫を作ることはできず、どうするかが深刻な問題になっている、とお話した。4月にフィンランドの首相が日本に来ていたが、そのことでなにか有効な助言でもあったのだろうか。

また、昨年末から今年初めにかけて EU 諸国に押し寄せた大量の難民のことも話題になった。ラーティは人口が約11万ほどなのだが、かなりの数が押し寄せていて、その住居、仕事、食糧などを提供するために市は大変な状況にあるとのことだった。しかしラーティは歴史的に移民によってできた町で、そのつど活力を得て、大きくなっている、今回もできるだけのことにはしている、とおっしゃっていた。日本の場合、去年難民の申請は4,000人に対して許可されたのは11人ということを見ると、あまりに違いすぎる対応である。

また、フィンランドの大学では現在は女性の数が男性より多いと教えられた

ので、それはフィンランドの女性国会議員数が40%を超えていることから見て不思議ではないと思う、日本では文系の場合はそのような学部もあるが、理系は圧倒的に男性が多いから、全体としては30~40%ぐらいではないか、と答えておいた。(ちなみに、日本の女性国会議員は、参院では15.7%、衆院では9.5%である。2015年9月現在)

平安神宮の散策も終わり、本殿の前に出てきた。本殿は何故朱色なのか、と聞くので、それは魔除けの色だと答えると、納得していた。お2人をタクシーでホテルまでお送りして、名残を惜しみながらお別れをした。今回は思いがけない突然のラーティからのお客様だったので、少数の会員しか参加できなかったのが残念だったが、参加した会員はそれぞれ多くの興味深い発見をしたのではないだろうか。ペリニエミさんも、これが最初の日本旅行なので多くの珍しい体験をなさったことと思う。

【京都は最も素晴らしい充実した1日だった】

帰国なさってからお礼のメールが来て、あれから箱根、富士吉田に無事着いた。生憎の雨だったが、富士山を垣間見ることができた。京都支部会員と会ったことは、今回の日本旅行の最も素晴らしい経験の1つだった、と書いてあった。こちらからも返信して、ラーティからの嬉しい突然のお客様で、私たちにもとても楽しい充実した1日だった。ラーティと京都のペアリングの歴史を大切にして、今後もこれが続いて行くことと願っている。京都は長い歴史的・文化的な歴史をもつ都市で、多くの神社仏閣・歴史遺産があるので、是非他の会員の方も京都に来てくださることを心からお待ちしている、と書いた。

(中川 洋子記)